

学生の変化から見た、
金融経済教育の新しいかたちとは何か



投資の力で未来をはぐくむ

Financial *Well-being* で考える

未来を見据えた 金融経済教育とは

一橋大学の講義から得た示唆

Contents

01	概要 (Design)	03
「ファイナンシャル・ウェルビーイングのための金融リテラシー」 — 未来をはぐくむ研究所と本講義について —		
02	構想 (Concept)	04
選択肢を広げるために、お金を学ぶ — “どうありたいか” から始める金融経済教育 — (担当教員対談)		
03	実証① (Evidence 1)	06
本講義を通じた学生の変化 — アンケートから見える意識・行動の変容 —		
04	実証② (Evidence 2)	08
本講義がもたらした変化と成長 — 受講学生インタビュー —		
05	接続 (Connection)	10
学生の実感から考える、これからの金融経済教育 — 期末レポートから広がる対話 — (特別対談: 社長 × 受講学生)		
06	示唆 (Insight)	14
金融経済教育を“役に立つ学び”にするには — 「何を学ぶか」から「どのようにつけて学ぶか」へ —		



概要

01

ファイナンシャル・ウェルビーイングのための金融リテラシー

— 未来をはぐくむ研究所と本講義について —

アセットマネジメントOne 未来をはぐくむ研究所 寄附講義の概要

未来をはぐくむ研究所と国立大学法人一橋大学は、2025年度秋冬学期(9～12月)に、一橋大学経済学部の学部基礎科目として「ファイナンシャル・ウェルビーイングのための金融リテラシー(アセットマネジメントOne 未来をはぐくむ研究所 寄附講義)」(全14回・2単位)を開講しました。当社が単独で実施する寄附講義は、本件が初めてとなります。定員を上回る履修希望があり、受講者は抽選により決定し、経済学部2年生を中心とした約200名の学生が受講しました。

本講義の目的は、学生が金融の重要性や可能性を理解し、現在の生活や将来のキャリアに役立つ実践的なスキルを習得することです。現在、インターネットやSNSを通じて、多様な金融情報に簡単に触れられる一方、根拠が不十分な情報も混在しています。こうした環境だからこそ、大学生が成人として早期に良質な金融リテラシーを学び、「見極める力」を身に付けることが重要だと考え、本講義を企画しました。

カリキュラム概要	2025年度登壇者※役職は当時のもの
第1回 オリエンテーション	未来をはぐくむ研究所 一橋大学 山田 俊皓
第2回 まずはライフプランをイメージする！	未来をはぐくむ研究所
第3回 もらうお金とかかるお金を知る！	未来をはぐくむ研究所
第4回 お金のウェルビーイングを実現するために行動する！① — お金の貯め方、備え方、使い方	未来をはぐくむ研究所
第5回 お金のウェルビーイングを実現するために行動する！② — お金の増やし方	未来をはぐくむ研究所
第6回 【特別講義】 アセマネビジネスの全体像と運用会社の取り組み	取締役社長 杉原 規之
第7回 個人の資産形成における投資信託の意義	未来をはぐくむ研究所
第8回 運用の実際① 債券	CIO(債券) 清水 岳友
第9回 運用の実際② 株式	CIO(株式) 酒井 義隆
第10回 運用の実際③ 社会課題を解決する投資(ESG・エンゲージメント)	チーフESGアナリスト 村岡 義信
第11回 マーケットの仕組み・世の中の仕組み	未来をはぐくむ研究所
第12回 金融取引を正しく行うための仕組みと法律	リスク管理副本部長(弁護士) 小野 高央
第13回 【パネルディスカッション】キャリアとお金	一橋大学卒の当社社員
第14回 全体まとめ、Q&A、課題	未来をはぐくむ研究所 一橋大学 山田 俊皓

02 構想

選択肢を広げるために、
お金を学ぶ

—“どうありたいか”から始める金融経済教育—



担当教員対談 一橋大学 × 未来をはぐくむ研究所

本講義は、金融リテラシーを単なる知識として学ぶのではなく、学生一人ひとりが自らの将来や選択と結びつけて考えることを目指して設計されました。担当教員2名が、その狙いと講義設計の背景について語ります。「ファイナンシャル・ウェルビーイングのための金融リテラシー」という講義名に込めた問題意識にも迫ります。

— あらためて、
本講義の設計の意図を教えてください。 —

伊藤 ファイナンシャル・ウェルビーイングとは、単に収入や資産の多さを指すものではありません。自分の経済状況を適切に管理し、必要な選択ができること。そして、現在と将来の両方に安心感を持てている状態を指すものだと、私たちは捉えています。

今回の講義で大切にしたのは、金融リテラシーを単なる知識として学ぶのではなく、学生が自分自身の状況に応じて「選べる状態」をつくることでした。お金について学ぶことは、人生の選択肢を広げることにつながります。その視点を、大学生のうちに持ってもらうことを意識して講義を設計しました。

山田 学生たちは、少子高齢化や社会構造の変化、AIの影響など、長期的な社会変化についてはよく認識していると思います。一方で、それを自分自身の将来に引き寄せて考える場

面では、視野が短期的になりがちな印象があります。たとえば、「就職して30歳までにこれくらいの年収がほしい」といった目標はあっても、そのためにどのようなキャリアを歩むのか、今何を準備すべきなのかを、お金の知識と結びつけて具体的に考える機会はまだ少ない。だからこそ、金融リテラシーやキャリアプランを、自分の将来像と結びつけて考える機会が必要なのだと思います。

— 今回の講義は、経済学部的基础科目として、
主に2年生を対象に開講されました。
この位置づけには、どのような意義が
あったのでしょうか。 —

山田 2年生は、多くの学生が20歳を迎え、大人としての責任を少しずつ意識し始める時期です。翌年には就職活動も控えています。

その時期に、単に金融理論の知識を学ぶのではなく、自分の将来やキャリアと結びつけながらお金について考える機会を持つことは、その後の大学での学び方や、将来の捉え方にもつながります。基礎科目としてこの講義を置いた意義は大きかったと考えています。

伊藤 全14回の講義全体を通じて、学生一人ひとりが自身の将来やキャリアと結びつけて考えられることを意識しました。いきなり投資やマーケットの話から入るのではなく、前半で

はライフプランや収入・支出、貯める、備える、使うといったパーソナルファイナンスを扱い、後半で市場や運用、制度といった社会との接続へと広げる構成としました。この順番にはこだわりました。

まず「自分はどう生きたいのか」「どのような選択肢を持っていたいのか」を考え、そのうえで、お金や金融の知識が自分にどう関わるのかを捉えてもらう、という流れです。

— アセットマネジメントOneの実務家が
全ての回で講師を務めた点も特徴でした。 —

山田 大学で専門的な理論を体系的に学ぶことは重要です。金融や経済の出来事を全体の流れや仕組みの中で理解し、表面的な情報に流されず判断する力につながるからです。一方で、理論だけでは現実との距離が生まれてしまうこともあります。今回、アセットマネジメントOneの実務家の方々が、現場での経験を踏まえて講義してくださったことで、学生が金融を自分の生活や将来の選択と結びつけて考える機会になったと感じています。

伊藤 金融や資産運用というと、どうしても専門的で難しいもの、あるいは一部の人だけに関係するものとして受け取られがちです。しかし実際には、収入を得る、支出を管理する、将来に備えるなど、誰にとっても身近な営みです。今回の講義が、「理論通りにいかない現実の世界でどう判断するか」を考える機会になっていれば嬉しいですね。

— 講義を終えてみて、
印象的だったことはありますか。 —

山田 当初は、後半の投資や運用実務の部分に学生の関心が集まると想像していました。もちろん、そこにも興味を持っていたと思います。

ただ実際には、前半の「お金とは何か」「ファイナンシャル・ウェルビーイングとは何か」といったテーマに、学生たちが非常に刺激を受けていたことが印象的でした。

お金と人生を結びつけて考える視点に触れたことが、学生にとって大きな気づきになっていたのだと思います。

伊藤 私たちにとっても、それは大きな学びでした。特に講義後のアンケートでコメントが多かったのが、2回目の講義で行ったライフイベント表のワークです。

まず、これから10年間の時間軸を引き、自分や親、祖父母の年齢を書き込んでもらいました。すると、自分が何歳のときにどんなライフイベントがあり、そのとき家族は何歳なのかが見えてきます。遠く漠然としていた未来が、急に自分の意思決定の対象に変わります。

実際に学生からも、「遠いもののように感じていた未来の生



アセットマネジメントOne
常務執行役員 未来をはぐくむ研究所長 伊藤 雅子

活像がぐっと近づいてきた」という声がありました。

また、初回時点で金融知識に自信がないと答えた学生が約9割だったのに対し、受講後は自信があると答えた学生が約9割となりました。さらに、何らかの行動を起こした学生が6割を超え、NISA口座を開設した学生も40名ほどいました。

こうした変化は、単に知識が増えたからだけではなく、意思決定の前提や、未来に対する解像度が変わったことが大きいと感じています。

— 学生の変化は、大学での学びにも
影響を与えたのでしょうか。 —

山田 行動だけでなく、学問への向き合い方にも変化が見られました。

大学での学びは、すぐに答えが出るものばかりではありません。しかし、自分の人生や社会の現実と結びつけて考えることで、理論の意味や必要性がより実感できるようになる。今回の講義には、そうした学び方への入口としての意味もあったと思います。

伊藤 運用会社である私たちだからこそその視点が役立ったのであれば、嬉しく思います。

今回の講義では、一人ひとりのお金の判断が、社会のお金の流れをつくっているということもお伝えしました。投資は、自分のお金を増やすためだけのものではありません。自分にとってよりよい選択肢を増やし、同時に社会に参加することでもあります。

だからこそ、単に金融知識を伝えるだけではなく、自分で考え、判断する力を育てる金融経済教育が、これからの社会の基盤になるのだと思います。

資産運用に携わる立場だからこそ、お金と社会のつながりも含めて、若い世代が自分らしい人生を選び取るための学びを、これからも届けていきたいと考えています。

03 実証 ①

本講義を通じた学生の変化 — アンケートから見える意識・行動の変容 —

一橋大学での講義では、リアルタイム出席管理システムのアンケート機能を大いに活用しました。各回の講義内容に合わせて問いを設計し、講義中にその場でアンケートを提示し、学生に即時に回答してもらいました。本章では、こうして得られたアンケート結果を手がかりに、学生のお金に関する知識や意識・行動などが、講義を通じてどのように変化していったのかをご紹介します。

まず第1回「オリエンテーション」では、金融リテラシーに関する正誤問題、金融知識への自信、投資に関する印象などについてアンケートを実施し、本講義開始時点の現在地を確認しました。

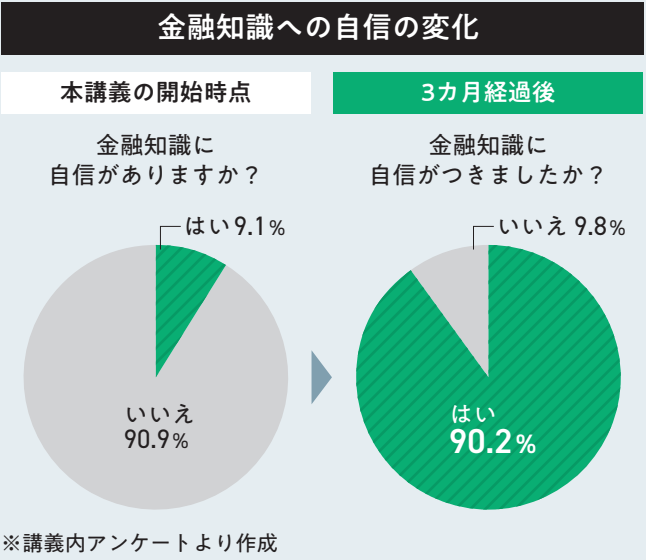
金融リテラシーに関する正誤問題は、金融経済教育推進機構（以下、「J-FLEC」という）が実施する「金融リテラシー調査」において、日米の金融リテラシー比較にも用いられる6問に回答してもらいました。正答率の平均は85.7%と高く、J-FLECによる2025年調査の平均（45.9%）を大きく上回りました。基礎的な用語や仕組みについては、一定程度理解が進んでいる学生が多いことがうかがえます。

一方で、⑤「債券価格と金利の関係」を問う設問については正答率が5割を下回りました。株式や投資信託に比べて、債券は学生にとって馴染みがなく、商品性や価格変動のイメージを持っていないことが背景にあると考えられます。

講義開始時点のアンケート結果		
設 問	一橋大学 アンケート	金融リテラシー調査 (2025年)
正誤問題6問の正答率(平均)	85.7%	45.9%
① 複利	90.9%	42.6%
② インフレ	94.5%	55.2%
③ 住宅ローン	97.0%	62.8%
④ 分散投資	96.4%	51.6%
⑤ 債券価格	47.3%	25.7%
⑥ 72の法則	87.9%	37.7%
学校などでの 金融経済教育受講経験	38.8%	8.7%
金融知識の自信が ある人の割合	9.1%	13.4%

※正誤問題6問の問題文はJ-FLEC「金融リテラシー調査(2025年)」をご確認ください。

Questionnaire



また、「これまでに学校などで金融経済教育を受けたことがあるか」については、38.8%が「受けたことがある」と回答しました。高校における金融経済教育の内容が拡充されたのは2022年以降であり、その期間と高校生活が重なっている学生も多く、J-FLEC調査の8.7%を大きく上回っており、学校現場における金融経済教育の機会の増加がうかがえました。しかし興味深いのは、「金融知識について自信があるか」に対する学生の回答です。J-FLECの調査でも、アメリカでは約6割が「自信がある」と答えるのに対し、日本では13.4%にとどまることが指摘されていますが、一橋大学の学生はさらに控えめに回答しており、本講義開始前の時点では「自信がある」と回答した学生はわずか9.1%にとどまりました。知識問題に対して高い正解率を示した一方で、自信は高くありませんでした。

なお、投資経験については、すでに約四分の一の学生が現在投資を行っており、投資経験のない学生も含めて大半（95%）が投資に対してポジティブなイメージを持っていました。その後、約3カ月間の講義を終えたタイミングで、「これまでの講義を通じて金融知識に自信はつきましたか？」と改めてアンケートを実施したところ、約9割が「自信がついた」と回答しました。講義開始時点では、ほとんどの学生が金融知識に自信がないと回答していましたが、体系的に3カ月学んだことにより、理解が整理され、大半の学生が自信をつけることができたものと思われます。一方で、「自信がついていない」と回答した学生に、なぜ自信

がついていないのかを確認したところ、「日常生活での実践が足りない」「社会経験をしていない」といった声が上がりました。これは、知識としては理解できても、実際に意思決定を行い、その結果までを含めて経験していないために確信が持てないことが背景にありました。得られた知識を行動へつなげる後押しとなる仕掛けが、自信の定着にとって重要であると考えられます。実際に、「自信がついた」と回答した学生からは学んだ内容を具体的な行動に移したという声も多く寄せられました。特に印象に残った講義内容が、学生にとって具体的な行動のきっかけになったようです。理解が深まると同時に、「自分の生活のどこに関係するか」「これから何を変えられるか」という視点につながり、家計管理や情報収集の習慣化、NISA口座の開設など、実践へと落とし込んだ事例が多くみられました。本講義を通じて、知識の獲得にとどまらず、学生の意識や行動の変化につながる学びを提供できたと考えています。

講義を通じて実際に行動に踏み出したこと(例)



実証②

04

本講義がもたらした変化と成長

— 受講学生インタビュー —

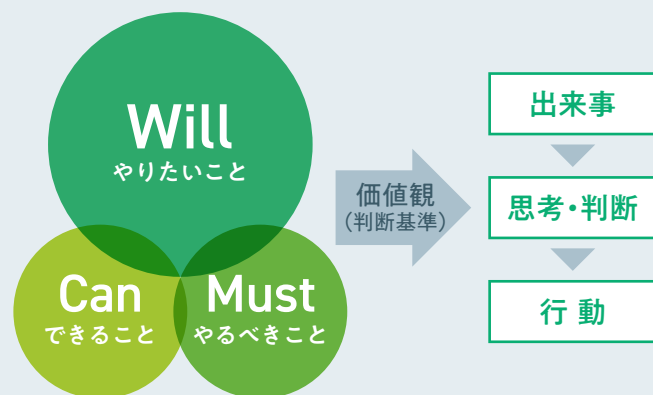
本講義を受講した学生2名に、講義の感想や意識・行動の変化についてインタビューを行いました。
学生は講義の中でどのようなことを学び、感じたのでしょうか。

—— 講義で学んだことを通して、
日々の生活の中で意識や行動の変化に
つながったことはありますか。

清水 社会人になった後の10年間の収入と支出を整理したライフイベント表を作成しました。もともと私は物事の背景や理由を考えることが好きなのですが、講義を受ける中、「なぜ老後には多くの資金が必要になるのか」や「基本給と手取り額に差が生じるのはなぜか」といった点に関心を持つようになりました。実際に就職予定先の企業について調べ、ライフイベント表を作成していく中で、新卒1年目は住民税がかからないことや健康保険組合によって保険料の負担が異なることなどを知り、これまで自分が抱いていた漠然としたイメージと、現実とのギャップに気づくことができました。

藤田 約3カ月間にわたり金融経済教育を受けたことで、世の中の仕組みを知りたいという知的好奇心を持てるようになったと感じます。講義を受講する以前は、経済学の知識はあったものの、投資などの金融知識にはあまり関心がありませんでした。しかし、講義を通して金融の仕組みや実務との関わりを学んだことで印象が大きく変わり、投資に対してはポジティブなイメージを持つようになりました。また、ニュースを見ることも以前より面白く感じられるようになり、自分の金融リテラシーへの自信にもつながったと思います。

キャリア形成のフレームワーク



自分らしい価値観を大切に、
ありたい姿を考える

—— 全14回の講義の中で印象に
残っていることはありますか。

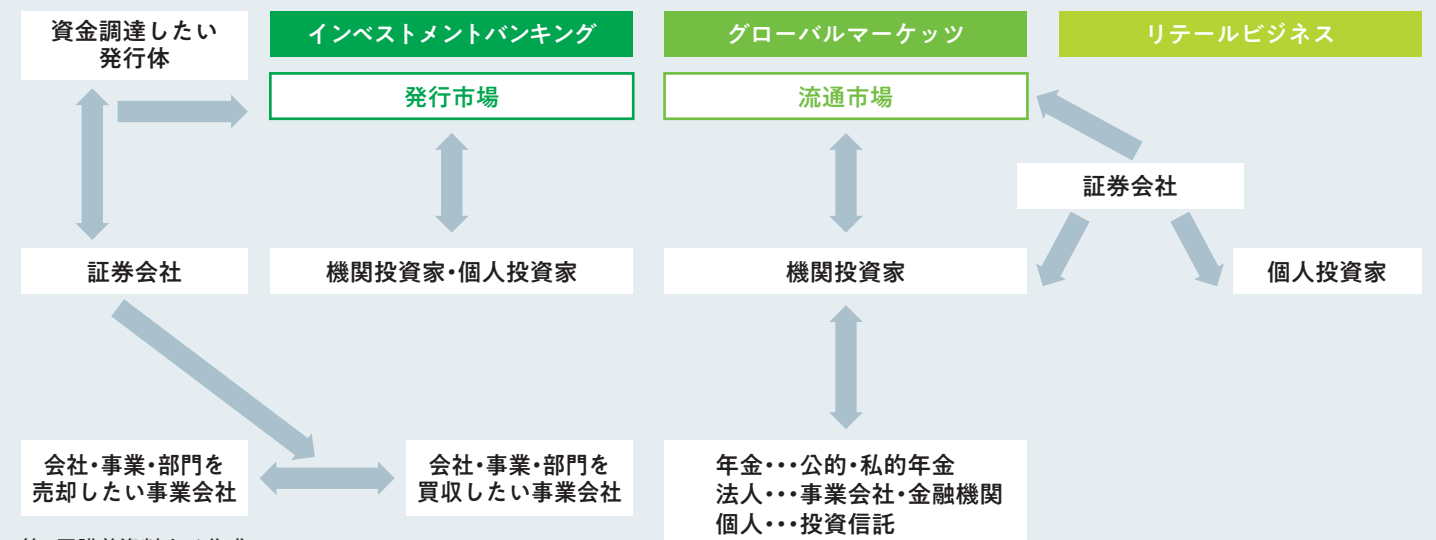
清水 アセットマネジメントOneで働く一橋大学卒業生の方が登壇した、第13回のキャリアの講義です。これまで学んできた金融経済の知識が実務でどのように活用されているのかという具体的な話を通じて、「理論」と「実践」のつながりを強く実感できました。さらに、資産運用会社の業務内容だけでなく、私たち大学生がこれからのキャリア形成においてどのような意識を持つべきかについても、理解が深まりました。また、第14回で紹介された、「Will(やりたいこと)」「Can(できること)」「Must(やるべきこと)」というキャリア形成のフレームワークが特に印象に残っています。講義全体を振り返ると、将来のキャリアと資産形成を考える際には、どちらも「自分にとっての幸せとは何か」というWillが出発点になることに気づかされました。

藤田 二点あります。一点目は、「ファイナンシャル・ウェルビーイング」という考え方です。これまで金融と自分の生活を結びつけて考える機会はありませんでした。新鮮であり、日々の生活を見直すきっかけになりました。二点目は、ファンドマネジャーによる株式の講義です。実務的な内容に加え、証券会社や投資家、事業会社、資産運用会社といったそれぞれの関係性について、具体的なエピソードを交えながら分かりやすく説明していただき、強く印象に残っています。就職活動の際にも、その関係図を何度も見返すほど印象的な内容でした。



一橋大学経済学部3年
清水 尊斗さん

証券市場の関係図



第9回講義資料より作成



一橋大学経済学部3年
藤田 健人さん

—— 今回の講義で得た学びから、
これからの生活をどのように送っていきたいですか。

清水 講義で取り組んだライフデザインやライフプランニング、就職活動で行った自己分析などは、一度やって終わりではなく、人生の節目ごとに見直していくことが大切だと思います。自分がどのように生きたいのかを考え、その実現のために必要な知識や行動を見つける、このような思考のサイクルを繰り返していきたいです。

藤田 経済面での安心感や人生を楽しむための選択肢を持ちたい、言い換えればファイナンシャル・ウェルビーイングを実現したいという思いから、投資に取り組みたいと考えています。また、将来は海外に関わる仕事に就く予定であるため、マーケットや世界経済の動向を把握し、広い視野を持てるようになりたいです。

接 続

05 学生の実感から考える、 これからの金融経済教育

— 期末レポートから広がる対話 —



アセットマネジメントOne
取締役社長 杉原 規之

一橋大学経済学部3年
小林 竜之進さん

一橋大学経済学部3年
平賀 貴大さん

一橋大学経済学部3年
森住 唯宇さん

アセットマネジメントOne
未来をはぐくむ研究所
五十嵐 さやか

特別対談 社長 × 受講学生

期末レポートの中で、独自で興味深い視点から提言を行った一橋大学経済学部の学生3名をお招きし、取締役社長の杉原と、未来をはぐくむ研究所の五十嵐(ファシリテーター)を交えて座談会を実施しました。

金融を特別な知識としてではなく、日々の生活の中で意思決定するための力として、どのように身に付けていくべきなのか。学生たちの実感に基づいた言葉から、これからの金融経済教育に必要な視点を探りました。

寄附講義を通じて、金融が「自分ごと」になった

五十嵐 まずは、寄附講義を受講したきっかけや、実際に受けてみて感じた変化について教えてください。

森住 一橋大学経済学部3年の森住です。行動経済学のゼミに所属していて、僕は主に意思決定理論を学んでいます。

寄附講義に興味があったことに加えて、親が50歳くらいから株式投資を始めたこともあり、自分自身も投資に関心を持つようになりました。高校までにも金融や経済について学ぶ機会はあったのかもしれませんが、正直あまり記憶には残っておらず、今回の講義を通して初めて、自分の中に知識や考え方が根づいていく感覚がありました。

平賀 一橋大学経済学部3年の平賀です。統計学やデータ分析を主に学んでいます。

講義を受けた理由は、投資に興味があったことと、企業による寄附講義という形式が面白そうだったからです。ちょうど親がNISAを始めるかもしれないタイミングでもあり、講

義で学んだことを家族との会話にも活かすことができました。

小林 一橋大学経済学部3年の小林です。僕もデータ分析を主に学んでいます。

講義内容を見たときに、授業だけで完結するのではなく、人生単位で活かせそうな内容だと感じました。家族がNISAをやっているのですが、講義を受けたことで投資している商品について聞いたり、分散投資の考え方を共有したりできたのは、すごく良かったと思います。

杉原 皆さんがご家族と自然にお金や投資の話をしているのは、とても印象的です。金融や経済は、知識として学ぶだけでなく、生活や家族との会話の中で使われてこそ意味があるものだと思います。今回の講義が、そうした会話のきっかけになったのであれば、とても嬉しく思います。

目指すべきは、生活に根ざす金融経済教育

五十嵐 皆さんには「日本の学校・家庭における理想の金融経済教育」をテーマにレポートを書いていただきました。共通して印象的だったのは、金融経済教育の目的を、単に知識を身に付けることではなく、「生活の意思決定能力を養うこと」として捉えていた点です。

そのように考えた理由や背景について、小林さんからお伺いできますか。

小林 金融経済教育について調べていく中で、知識習得にとどまってしまう、行動変容につながっていないという課題があると感じました。自分自身の経験としても、学校での勉強は座学にとどまっていた印象があります。

森住 僕も、高校以前に金融経済教育を受けたのかどうか、すぐに思い出せないような感じです。大学生になるとアルバイトを始めて、自分でお金を稼ぎ、それをどう使うかを考えるようになります。ですが、高校以前はそうした経験が少ないので、投資やNISAという言葉聞いても実感が湧きにくいのだと思います。



知識から一歩先へ。
行動を育む金融経済教育。

平賀 僕も、学校で学ぶことと、実際に社会の中で生活していくために必要なこととの間には、少し距離があると感じていました。

中学生の頃から、金融を含めた生活に必要な知識を学ぶ「生活」という科目があったらいいのと思っていました。生活に必要な知識を家庭や日々の経験だけに任せてしまうと、家庭環境による差が生まれてしまいます。だからこそ学校でも、生活に結びついた知識を扱う必要がある。今回の金融経済教育も、そうした「生活していくための知識」の一つとして捉えています。

五十嵐 平賀さんのレポートでは、金融経済教育を単独で捉えるのではなく、冠婚葬祭の知識なども含めて、生きていくうえで必要な知識をまとめた「生活」の科目として考えられていた点が印象的でした。

また、金融経済教育の指針になるものとして、J-FLECが示し



ている「金融リテラシー・マップ」があります。これは、自立的で安心感のある生活を送るために、国民一人ひとりが身に付けておくべき金融リテラシーを整理したものです。マップでは、「生活スキルとして身に付けること」が目的として記載されていて、皆さんがレポートで書いていた「生活の意思決定能力を養う」という着眼点とも近いのではないかと感じました。

杉原 マップでは、金融がかなり実生活に近いものとして整理されていることがわかります。家庭科の中でも、家庭生活や衣食住の延長線上に、消費生活や金の使い方が位置づけられていますよね。

ただ、皆さんが高校以前に受けてきた授業では扱える範囲に限界もあり、金融経済教育が生活全体の文脈と結びついて扱われていた感覚は、あまりなかったのかもしれない。整理があったとしても、実際の学びとしてどこまで自分の判断や行動に結びついているか。そこに一つの問題意識がありますね。



生活に必要な知識を、
誰もが学校で学べる教育へ。

Connection

キャッシュレス時代に必要な「金融OS」

五十嵐 ここからは、皆さんのレポートを深掘りしていきたいと思います。森住さんは、キャッシュレス決済を切り口にされていましたね。

森住 はい。投資や資産形成を行う前に、まずはその土台となるお金の知識や考え方を身に付けることが必要だと思っています。レポートでは、それを「金融OS」と表現しました。キャッシュレス決済は日常的な支払い手段になってきていますが、便利な一方で、現金に比べるとお金を使っている感覚が薄れやすい面があります。サブスクの自動更新や少額課金、後払い決済なども、気づかないうちに家計の負担になることがあります。

だからこそ、キャッシュレスが広がっている今の時代には、お金をどう管理し、どう使うのかを考える力が、これまで以上に重要だと思いました。投資や資産形成の前に、まず日々の支払いを把握し、自分で判断できる基準をつくるのが大切だと考えています。

五十嵐 マップ上では、中学生で「様々な決済の仕組みと方法について理解する」という項目が出てきますが、森住さんは、いつ頃からどのようなことを学ぶのがよいと考えていますか。

森住 段階を踏むことが大切だと感じています。小学生のうちは、まず現金を通じてお金そのものの仕組みを理解するのがよいのではないのでしょうか。マップでも、小学生の段階では「必要なものと欲しいものを区別する」といった家計管理の考え方が示されていますが、そうした判断の土台を身に付けることが大事なのではないかと思っています。中学生や高校生になると、自分で買い物をする経験が増えてきます。僕自身も高校生の頃からPayPayを使っていて、急にお金が必要になった時に、親から送金してもらうこともありました。そうした段階で、キャッシュレス決済や契約、信用の考え方も含めて、日々の支払いをどう判断するかを学んでいくのが良いのではと思います。

健康への投資から、金融を考える

五十嵐 次に、小林さんのレポートについて伺います。小林さんは、金融経済教育に医療経済学的な視点を導入するという提案をされていました。

小林 医療分野では、病気などの不確実性に対して、健康診断を受けたり、予防接種を受けたり、適切な保険を選択したりします。いま一定の手間や費用をかけることで、将来の負担を小さくしようとする行動です。

現在のコストと将来のリターンを見比べて意思決定するという点で、健康への投資と資産形成は似ています。



そう考えるようになったきっかけは、叔父が腎臓病を患っていたことです。生活習慣が関係する病気だったので、叔父から「若い頃に多少手間がかかっても、野菜をちゃんと食べた方がいい」と言われたことがあり、健康習慣も結局は将来に対する投資なのだと感じました。

また、金融リテラシーが高い人は喫煙率が低いというデータがある一方で、健康診断の受診率が高いとは限らないというデータもありました。喫煙を避けることは、明らかに体に害があるものを回避する行動です。一方で、健康診断を受けることは、自分から将来の利益を取りにいく行動だと思います。そこまでの行動に至っていない点が、金融の知識はあっても投資行動に移していない現状と似ていると感じました。

杉原 資産形成と健康診断は、一見違うもののように見えますが、今の時間やお金を将来の生活への投資として捉えるという点では似ていますね。頭では大事だとわかっていても、実際の行動に移すのは簡単ではない。だからこそ、「今の費用」ではなく「将来のリワードにつながるもの」として、どう実感を持ってもらうかが重要なのだと感じました。

五十嵐 マップでは、資産形成と保険は別の領域として整理されていますが、将来に備えるという点では、どちらも不確実性への向き合い方に関わっています。小林さんは、この考え方を小中学生にも伝えたいと書かれていました。

小林 投資の根本にあるのは、「長期的な視野を持ち、不確実性に備え、合理的な選択をする」ことだと思います。それはさまざまな意思決定の場面で活用できる考え方なので、小中学生のうちから学んでおいた方がいいと感じました。ただ、小中学生にいきなり金融や投資の概念を導入するのは難しい。その点、医療や健康は誰にとっても身近なテーマです。家庭科や保健体育の授業の中に組み込むことで、導入しやすくなるのではないかと思います。

「生活」という科目で、実学と座学をつなぐ

五十嵐 最後に平賀さんの提案について伺います。平賀さんは、新しい授業科目として「生活」を提案されていましたね。

平賀 はい。先行研究を調べる中で、金融経済教育を学校だけ、家庭だけ、あるいは授業の家庭科だけで完結させるのではなく、複数の科目や家庭での学びと関連づける「クロスカリキュラム」として扱う方が効果的だとされていることがわかりました。

ただ、金融だけで新しい科目をつくるのは現実的ではありません。そこで、金融を含めた生活知識全体を扱う「生活」という科目をつくることを提案しました。既存の科目で学ぶ座学と補完し合いながら、実際に手を動かして考える実学的な内容にすることで、生活リテラシーや金融リテラシーを高めていけるのではないかと考えました。

五十嵐 その中で、金融の分野では具体的にどのような内容を学ぶ必要があると考えていますか。

平賀 マップに書かれている内容でいうと、資産形成や保険、ローン・クレジットなどは、多くの人が関わるものなので、きちんと扱う必要があると思います。

ただ、それらの内容を、知識として覚えるだけではなく、自分の生活に引き寄せて考えることが大事だと思います。自分はお金をどう使っていくのか、投資をしたらどう判断するのか。そうしたことを、実際の行動と結びつけて考えていくイメージです。

杉原 皆さんのお話を聞いていて、金融を何か特別なものとして切り出すのではなく、日々の選択や価値観の中にあるものとして捉えているのが印象的でした。お金を貯めること、使うこと、将来に向けて備えることは、どう生きたいか、何を大切にしたいかという日々の判断にもつながっています。学びは生活の中で使われて初めて、自分のものになっていくのだと思います。

知識で終わらせない金融経済教育へ

五十嵐 最後に、今日の座談会の内容も踏まえながら、改めて金融経済教育にはどのような視点が必要だと思うか、あるいはどのような学び方が大切だと感じたかを、お伺いできればと思います。

森住 お二人の提案を聞いて、金融経済教育を家庭とつなげ、実践につなげていくことの大切さをあらためて感じました。一方で、家庭や地域によって学びの機会に差が出ないようにすることも必要なのだと思います。

小林 金融そのものを前面に出すのではなく、健康やキャッシュレス、学校科目のように、それぞれにとって身近なテ

※講義でのレポートの内容は担当教員が適正に評価を行ったうえで、この度本人と大学に了解を取り、その内容の一部を共有・公開しております。

マを軸にしながら金融経済教育を組み込んでいくことに可能性があると感じました。長期的な視点で意思決定を行い、それを実際の行動の変化につなげていく学びが大切なのだと思います。

平賀 今回の座談会を通じて、知識として学ぶだけではなく、実際の行動につなげるところまで含めて教育なのではないかと感じました。「生活」という科目をつくるというアイデアで考えていましたが、既存の教育の中にある要素から出発して、今の教育を少し変えていくという考え方も面白いと思いました。

杉原 これから社会人になっていく中で、金融はより具体的に生活の中に入ってくると思います。そのときに、「昔こういうことを学んだな」「こういう考え方があったな」と思い出せるものがあると、実際の行動につながっていくのだと思います。

本来、将来に向けてお金のことを考えるのは、前向きで楽しいことでもあるはずです。自分がこれからどう暮らしていきたいのか、そのために何を選び、どう備えていくのかを考えることでもあるからです。

だからこそ、運用会社の役割も、単に商品を提供することだけではないと思います。生活の中で必要になったときに手に取れる情報や、判断のヒントになるものを届け続けることも、大切な役割です。今日の皆様のお話を聞いて、そうした学びや情報が手の届くところにある状態をつくっていくことの大切さを、改めて感じました。



06 示唆

金融経済教育を “役に立つ学び”にするには？ —「何を学ぶか」から「どのようにつなげて学ぶか」へ—

1. 講義実践における検証

本講義では、金融リテラシーを「知識として理解する」だけで終わらず、学生が自分で判断し行動できる「**実際の判断力**」へつなげることを目的にしました。そのためには「**①人生の話から入ると、学びが自分ごとになる**」、「**②個人の目線と社会の目線の重なりが、金融行動への前向きな動機付けとなる**」

視点 ①

人生の話から入ると、 学びが自分ごとになる

本講義では、投資やマーケットの説明から入るよりも先に、学生自身が将来や人生を具体的に思い描き、「その実現のために資産形成が必要になる」という動機づけを作りました。第1回で「ファイナンシャル・ウェルビーイング」という考え方を提示し、第2回ではウェルビーイングを実現するために「どのような人生を望むか(ライフデザイン)」、その手段としてのライフプランを考えるとところから始めています。

座談会やインタビュー、講義後の学生のコメント(図表1)にもあるように、この導入によって多くの学生は「金融リテラシーは自分の人生に直結する」という感覚を持つことができました。この「自分ごと化」が学習動機となり、その後の学習意欲を支える土台になったと考えられます。

という2つの視点が重要であるという仮説のもと、全14回のカリキュラムを設計し、講義を通じてその有効性を確認しました。講義中の学生コメントやアンケートは、それぞれの視点が学習意欲や行動変容にどのようにつながったのかを示しています。

図表1：視点①に関する学生のコメントと講義回

第1回 オリエンテーション

なぜファイナンシャル・ウェルビーイングの実現が重要であるのかを理解することができました。これから必要な金融リテラシーのベースを学ぶにあたって、「学習した後に行動に移す」ということを念頭に置きながら積極的に授業に参加したいと感じました。

第2回 まずはライフプランをイメージする！

この授業をきっかけに両親と資産運用について話し、親がどのように家計を守ってきたのかというリアルな話を聞くことができた。授業で得た知識と実生活が結びつき、これからの人生におけるお金の価値観や向き合い方を深く見つめ直す良い機会だった。

視点 ②

個人の目線と社会の目線の重なりが、 金融行動への前向きな動機付けとなる

本講義は、前半のパーソナルファイナンスに閉じず、後半で株式・債券・ESG投資やマーケットなどを扱いました。その際、講師は専門知識を説明するだけでなく、「そのテーマと個人の関わり」にも触れました。これにより学生は、金融を「社会のどこかの話」ではなく、「個人と社会の中でとらえるもの」として理解が広がったと考えられます。

例えば、第10回ではESG投資とエンゲージメントをテーマに、投資には企業活動や社会の発展を支える面もあることを示しました。講義前半で投資を「資産形成の手段」として学んだ学生が、この回を通じて「投資をする意味」を一段深く捉えた結果として、NISA口座の開設など実際の行動が喚起されたと考えられます。

図表2に示したように、学生のコメントからも、金融を「自分ごと」として捉え直し、さらに社会との関係の中で理解を深めている様子が確認できます。

図表2：視点②に関する学生のコメントと講義回

第6回 アセマネビジネスの全体像と運用会社の取り組み

日本の資産運用ビジネスについて学び、日本ではまだ「貯蓄から投資」への転換が十分に進んでいないことを実感した。依然として現預金の割合が高い点は、リスクへの慎重な国民性を反映していると感じる。一方で、NISAやiDeCoの拡充など、政府が「資産運用立国」を掲げて積極的に制度改革を進めていることに希望を感じた。資産運用を通じて、家計・企業・社会が循環的に豊かになる仕組みを理解し、自分自身も主体的にお金と向き合う必要性を強く感じた。

第9回 運用の実際②株式

金融を社会や経済を支える仕組みとして理解できたことが大きな学びでした。本講義全体を通じて、金融リテラシーとは知識だけでなく、判断力や姿勢を含むものであると学べた点が、最も知ってよかった点だと感じています。

第10回 運用の実際③社会課題を解決する投資

ESG投資は単なるきれいごとではなく、将来的に企業の利益につながる重要な要素であるという点に納得した。特に、投資家が株主として企業と対話し、気候変動対策や経営改善を具体的に促している事例には驚いた。投資を通じて社会課題の解決に参加できるという視点が得られ、有意義であった。

以上を踏まえると、金融経済教育では、次の「2つのつながり」を、授業のカリキュラムそのものに組み込むことが重要だと考えられます。

人生とのつながり



自分の人生や生活に結びつくものとして金融リテラシーを学ぶ

社会とのつながり



個人と社会の関係の中で金融をとらえる

2. 現行の金融経済教育への示唆

現在、標準的な教材やカリキュラムの基礎として広く活用されているのが、J-FLECが公表している「金融リテラシー・マップ」です。マップでは、「最低限身に付けるべき金融リテラシー」を8分類に整理し、年齢層ごとに「何を学ぶべきか」が示されています。例えば、高校生の代表的な内容は図表3の通りです。2014年の公表以降、改訂も行われ、学ぶべき項目は網羅的に整理されています。

こうした枠組みは、金融経済教育の内容を整理するうえで大変重要です。ただし、各項目の到達目標、すなわち「何を身に付けるか」は示されていても、「それらをどのような流れ(ストーリー)で教えるか」は教育現場に委ねられています。項目を個別に教えるだけでは学びが断片化しやすく、「知っては

いるけれど、自分にはどう関係するのかが見えにくい」「知識としては分かって、行動にはつながりにくい」という状態になりがちです。そこで必要になるのは、マップの内容を項目として並べるだけではなく、学びとして「つなぐ」ためのストーリー設計ではないでしょうか。

図表4は、金融リテラシー・マップの8分類を「つながり」の視点から捉え直したものです。生活設計や家計管理といった「人生とのつながり」を起点とし、その理解を基礎として、「社会とのつながり」の中で金融を捉え、さらに「商品・サービスの理解」へとつなげることで、各項目が一つのストーリーとして結びつき、最終的に判断や行動へとつながる学びとして整理されています。

「つながり」の視点で捉え直すと…

図表3:金融リテラシー・マップにおける「高校生」の代表的な内容

分類	高校生:社会人として自立するための基礎的な能力を養う時期
1 家計管理	自分のために支払われている費用を知り、家計全体を意識しながらよりよい選択・意思決定ができる。
2 生活設計	職業選択と生活設計を関連付けて考え、生涯の収支内容を理解して生活設計を立てる。
3 金融取引の基本としての素養	契約および契約に伴う責任に関する理解を深めるとともに、自ら情報を収集し消費生活に活用できる技能を身に付ける。
4 金融分野共通	お金や金融・経済の機能・役割を把握するとともに、預金、株式、債券、投資信託、保険など基本的な金融商品の内容を理解する。
5 保険商品	リスクを予測・制御して行動するとともに、被害事故を起こした場合には責任や補填問題が生じることを理解する。社会保険と民間保険の補完関係を理解する。
6 ローン・クレジット	貸与型の奨学金などローンの仕組みを理解し、返済方法や金利、延滞時の影響について考える。各種カードの機能や使用上の留意点を理解し、適切に行動する態度を身に付ける。
7 資産形成商品	基本的な金融商品の特性とリスクとリターンについて理解し、自己責任で金融商品を選択する必要があることを理解する。リスク管理の方法や定期的に貯蓄・運用し続けることの大切さを理解する。
8 外部の知見の適切な活用	トラブルに対処できる具体的方法を学び、実際に行使できる技能を身に付ける。

(出所)金融経済教育推進会議(事務局 金融経済教育推進機構(J-FLEC))

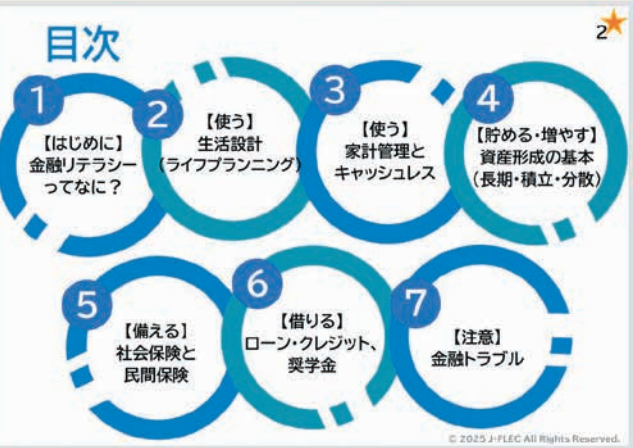
図表4:金融リテラシー・マップを「つながり」の中で捉えた構造(イメージ)



実際に、図表5で示したとおり、J-FLECの標準講義資料も概ね一定の流れをもって構成されています。一方で、学習指導案として掲載されているのは、図表6のように、各科目の学習指導要領に合わせて切り取った「50分または80分程度のパッケージ」です。この形式は、限られた授業時間で特

定テーマに絞って扱うには便利ですが、「なぜこの流れで設計したのか」「なぜそれぞれの項目を学ぶ必要があるのか」といった全体としての意図は、やや見えにくい面もあるように感じられます。

図表5: J-FLEC【標準講義資料_高校生向け】の目次



(出所)金融経済教育推進機構(J-FLEC)「【標準講義資料_高校生向け】大人になる前に知っておきたいお金の話」

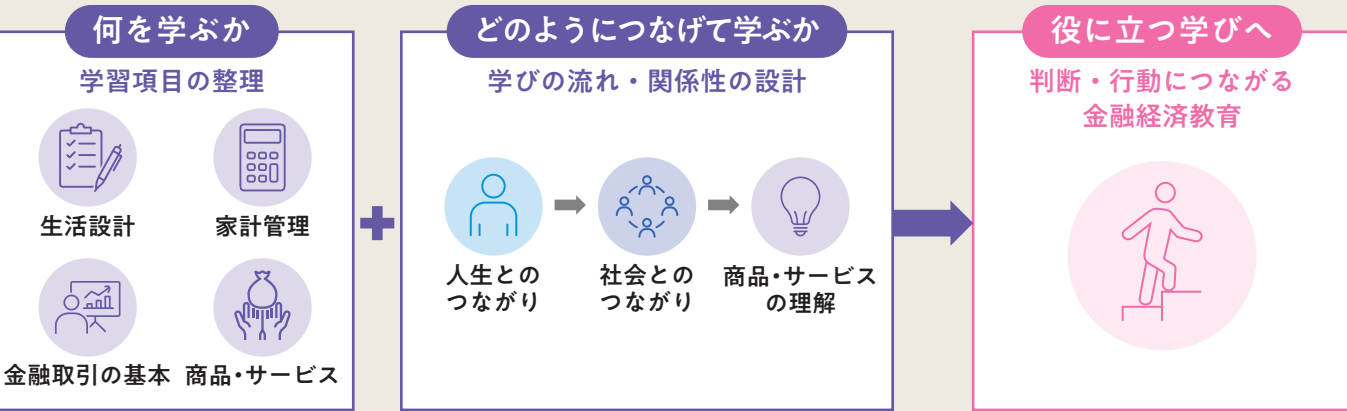
3. 学びをつなぐカリキュラム設計を

多くの情報があふれる現代では、金融経済教育にも「実践的な内容を効率よく提供すること」が求められ、テーマを切り取った情報が提供されがちです。しかし、情報を並べるだけでは学びが「知って終わり」になりやすく、生活の中で自ら判断して行動できる状態になるまでには至りにくいという課題があります。

もし、学習指導案や教材の中で、各項目を「どの順序で」「どの

関係性の中で」学ぶのが分かるようになれば、単発で学ぶ場合でも全体像を持ちやすくなり、教える側にとっても、学ぶ側にとっても有効でしょう。

「何を学ぶか」に加えて、「どのようにつなげて学ぶか」という視点を明確に持つことが、これからの金融経済教育を“役に立つ学び”にしていくうえで、重要な方向性になると考えられます。



未来をはぐくむ研究所について

未来をはぐくむ研究所は、個人の資産形成やファイナンシャル・ウェルビーイング、金融経済教育の分野における啓発・普及活動を目的として、2023年10月にアセットマネジメントOne内に設置した組織です。

「一人ひとりが、現在および思い描いた将来に向け、お金とよりよい関係を作り、安心して人生を楽しむことができる

未来」の実現を目指し、資産運用・金融経済・ファイナンシャルプランニングなどの専門知識やノウハウを有するプロフェッショナル人材が、商品とは切り離れた中立・客観的な立場での情報発信・金融経済教育活動を行っています。



- 当資料は、アセットマネジメントOne株式会社が作成したものです。
- 当資料は情報提供を目的とするものであり、投資家に対する投資勧誘を目的とするものではありません。
- 投資信託は、株式や債券等の値動きのある有価証券(外貨建資産には為替リスクもあります)に投資をしますので、市場環境、組入有価証券の発行者に係る信用状況等の変化により基準価額は変動します。このため、投資者の皆さまの投資元本は保証されているものではなく、基準価額の下落により、損失を被り、投資元本を割り込むことがあります。ファンドの運用による損益は全て投資者の皆さまに帰属します。また、投資信託は預貯金とは異なります。
- 当資料は、アセットマネジメントOne株式会社が信頼できると判断したデータにより作成しておりますが、その内容の完全性、正確性について、同社が保証するものではありません。また掲載データは過去の実績であり、将来の運用成果を保証するものではありません。
- 当資料における内容は2026年7月作成時点のものであり、今後予告なく変更される場合があります。
- 投資信託は
 1. 預金等や保険契約ではありません。また、預金保険機構及び保険契約者保護機構の保護の対象ではありません。加えて、証券会社を通して購入していない場合には投資者保護基金の対象にもなりません。
 2. 購入金額については元本保証及び利回り保証のいずれもありません。
 3. 投資した資産の価値が減少して購入金額を下回る場合がありますが、これによる損失は購入者が負担することとなります。